

平成27年度東京都高等学校対校陸上競技選手権大会のみどころ

昨年は山梨インターハイや長崎国体で、東京都の男子選手が優勝はもちろん多くの入賞を果たしました。

また、1年間を通じ東京都高校新記録も4種目樹立するなど健闘しました。

今年度の和歌山でのインターハイ・国体を目指し今大会が南関東大会への関門となります。今年の東京都大会で活躍が期待される選手たちをご紹介します。どうぞ、ご声援のほどお願いいたします。

男子

・短距離

今年の100m・200mは今大会から全国優勝をかけての対決が見られそうだ。昨年、山梨インターハイと長崎国体少年Aで100mに優勝し、世界ユース銀メダル保持者で全国高校ランク1位の大嶋 健太（東京3）と、長崎国体少年B100m優勝で、200mでは追い風参考記録ながら20秒台の記録を持つサニブラウン・A ハキーム（城西大城西2）との戦いは全国でも注目される対決である。自己記録は、100mでは大嶋10秒37、ハキーム10秒45と大嶋優位だが、200mでは大嶋21秒30、ハキーム21秒09とハキームが優位である。まだシーズンが浅く、向かい風が予想される駒沢競技場では超高校級の記録は期待できないかもしれないが、世界を視野に入れている日本を代表する高校生スプリンターの見事な走りを見られるのは楽しみである。

この二人の争いに目が奪われることと思うが、二人以外にも全国級の選手がいる。昨年の日本ユースで入賞している、大野 裕貴（立教池袋3）と日高 クリスチャン（東京3）である。また、大嶋と共に中学時代全国大会で活躍した小池 真郁（國學院久我山3）が昨年の肉離れから完全に復調した。ともに10秒6台の自己記録を持っているだけに、都大会からレベルの高い争いとなりそうだ。

200mでも、レベルが高く21秒台での入賞争いとなるだろう。ハキームや大嶋は20秒の可能性もあるが、支部予選から21秒台をマークしている選手が多い。中でも、1年生の井上 大地（東京1）は高校入学早々から21秒台を連発しており、向かい風の強い中でもダイナミックな走りで21秒67をマークした。上位に入することは間違いないだろう。決勝進出を賭けた準決勝のタイムに目が離せない。

400mでは、昨年の実績で考えると48秒47の記録を持ちインターハイにも出場している尾崎 正大（桐朋3）を中心としたレース展開となるだろう。しかし、今シーズンに入り48秒をマークしている選手がおらず混戦となることは必至だ。石山 翔瑛（東京2）や山田 真樹（都中央ろう3）にもラストの追い込み次第では優勝のチャンスが巡ってくる可能性が高いだろう。

・中長距離

800mではここ数年、ハイレベルな戦いから好記録が続出した。今年もタイムレースの予選からレベルの高い争いを期待したい。その中で、昨年1分50秒台をマークし長崎国体2位の齋藤 雅英（早稲田実業3）がこの種目に出場しないのは残念である。しかし、渡部 侑輝（城西大城西2）、柴田 隆平（都東大和2）の2年生コンビ、栗田 寛樹（巣鴨3）、角銅 啓多（都武蔵野北3）を中心に1分54秒台の選手も数多くいることから展開次第では好記録も期待できる。混戦となることは間違いないが、ラストスパート勝負となるのか？序盤から誰かが仕掛けるのか？予選から目が離せないが、決勝では1分50秒台に近づく優勝記録を期待したい。

1500mでは、昨年のインターハイ2位の齋藤 雅英（早稲田実業3）が、冬場の故障から調整が思うようにいかなかったためか「この種目一本」に絞ってきた。大会初日にすべてをかけて調整してくることだろう。それだけに、この種目の中心といえる。齋藤に対するのは、國學院久我山の齋藤 寛明（3年）をはじめ、越川 堅太（東京実業3）、谷野 航平（都日野台3）、藤井 優吾（日大豊山3）など自己記録3分台の選手も多く混戦であることは間違いない。ラストのスピードが持ち味の齋藤 雅英だけに最後の直線のスパート合戦がすさまじいことが予想される。もはや3分台でなければ6位入賞は厳しいかもしれない。

5000mでは、斎藤 寛明をはじめとする吉野 貴大（3年）、岸 哲也（3年）の國學院久我山勢と越川 堅太（東京実業3）、宍倉 健浩（早稲田実業2）、田中 智也・鈴木 奏太朗（ともに日体荏原3）、神戸 駿介（都松が谷2）と全国で戦えそうな選手が増えてきた事もあり順位狙いではなく積極的なレースをして記録も意識してもらいたい。昨年度の記録集を見ると50傑中35名が14分台の記録をマークしていることから東京都のレベルが上がっていることは明白だ。決勝では14分前半での入賞を目指してもらいたい。

3000mSCは、遠藤 宏夢（國學院久我山3）が実力的に優位で、昨年インターハイにまで駒を進めている。走力・ハードリングも抜きん出ており、優勝最有力で間違いない。是非とも9分を切るレース展開を期待したい。同じ國學院久我山の打越 晃汰（3年）や新人大会で活躍した本橋 佳樹（立教池袋2）らが粘り強く走れば勝機が訪れるかもしれない。9分20秒台が入賞ラインと思われる。

・ハードル

110mHは、平松 パプデンバ（都芦花3）がただ一人14秒台の自己記録を持ち（14秒52）、走力・ハードリングともひと冬越えて成長した。優秀な上級生が卒業し、この年代では全国でもトップクラスなだけに全国優勝を目指してもらいたい。上位を争うのは14秒台を目指す橋岡 優輝（八王子2）、福田 憲人（都小川3）、成澤 優雅（東京2）と思われるが、昨年中学用ハードルで14秒18の記録を持つルーキー井上 大海（東京1）もデビューしていきなり好記録をマークする可能性も高い。

400mHでは、東京高校の石山 翔英（2年）と北山 亮介（3年）の同一校の争いになりそうだ。石山は昨年53秒20と全国の1年生で最上位のタイムを新人大会でマークしている。今年は400mの走力も向上していることからタイムアップは必至だろう。北山は昨秋からの腰痛がやっと癒えたところなので、まだ万全とは言えない。現在では石山リードというところだ。また、110mHの平松も中盤までのインターバルを13歩で行ける潜在能力があるだけに経験を積みば一気に50秒台まで視野に入れることができるだろう。

・競歩

5000m競歩では、昨年度ユースオリンピックで金メダルを獲得し、この年代の世界チャンピオンである小野川 稔（東京実業3）の優勝は間違いない。しかも、第一支部予選で念願の東京都高校新記録を樹立し波に乗っている。だが、世界チャンピオンの小野川も、まだ全国チャンピオンにはなっていないだけに今年はインターハイ優勝をまず目指したいところだ。同じ東京実業で22分台の記録を持つ秋山 匠太（2年）もインターハイ出場に向け自己記録を伸ばしたいところだろう。

・跳躍

走高跳では、昨年2m03を記録している平塚 玄空（岩倉3）がケガで出場しないのは残念であるが、平塚以外にも2m00以上の記録を持っている出場選手が5名おり混戦だ。中でも勝負強い石川 遼（桐朋3）が一步リードといえる。しかし、鈴木 海平（堀越3）や支部予選で健闘した伊関 礼（國學院3）、遠藤 航（日大豊山3）、橋岡 優輝（八王子2）、飯野 公紀（東京2）の2年生の成長株も期待できる。全国大会で勝負できる2m10以上を跳ぶ選手が出現することを願う。

棒高跳は、4m50の自己記録を持つ熊坂 優（東京2）が優勝候補であろう。しかし、まだ技術的に安定感がないことから「確実」というわけではない。優勝の可能性があるのは、昨年から急成長の岩川 天羽（2）や白土 聖（3）、南雲 海哉（1）の明星学園トリオだろう。この種目を伝統的に得意とする明星学園と西尾 亮太（東京1）を含めた東京高校勢とのチーム戦の様相となりそうだ。今年の南関東地区はレベルが高いいだけに5m00に近づく記録を期待したい。

走幅跳は、今年は非常にレベルが高い。一昨年の東京国体少年男子Bで2位に入賞した中村 健士（都調布北3）が昨年の不振から復活し、7m30以上を跳べる実力を備えており非常に優位である。しかし、今年は「全日中」と「国体」の優勝者であるルーキーが入学してきた。7m21の記録を持ち全日中優勝の酒井 由吾（都南多摩1）だ。酒井は同時期開催のアジア・ユース（ドーハ・カタール）に日本代表として出場するため、今大会は欠場だが南関東大会までシードされる。もう一人、長崎国体少年Bで優勝した井上 大地（東京1）も7m

20の記録を持ち有力だ。このほかにも木之内 嘉史・舘 一樹（ともに東京3）と橋岡 優輝（八王子2）など7m30以上を跳躍できそうな選手が多いことから入賞ラインが7m10以上となる事は必至であろう。

三段跳では、舘・木之内の東京高校の両名と平川 雄大（都片倉3）が14m50以上の実力を持ち優勝を争うだろう。これまでの実績から言えば舘が優位であるが、競り合えば15m台の優勝記録となる可能性も高い。

・投擲

砲丸投では、昨年の日本ユースで8位入賞している栗本 恭宏（東京3）が出場者全体を通して記録・実績とも最上位の実力を有している。だが、まだ昨年の自己記録を更新してはいないので、石塚 恒祐（東京成徳3）・岩崎 瑞生（保善3）にも優勝のチャンスがあるだろう。13m30あたりが入賞ラインか？

円盤投では、昨年44m65をマークしている石塚 恒祐がパワーにものを言わせて優位となるだろう。しかし、日本ユースで4位に入賞している福留 大成（東京3）が第一支部予選で46m64をマークしていることから形勢が逆転しそうだ。大会記録に迫る投擲を期待したい。

ハンマー投では、保善高校の岩崎 瑞生（3年）が全国合宿に参加した際の課題を克服し始めて4月に56mを越えていてリードしている。昨年は力を発揮できず悔しい思いをしただけに2年分の思いをハンマーに伝えたいところだ。関東新人で3位とし53m台の記録を持つ五嶋 耀丞（東京3）や今季成長著しい人見 哲史（保善3）も優勝を争う可能性がある。5月10日（日）大井競技場でのハンマー投決勝にもご声援ください。

やり投げは、昨年・今季を通してまだ60mを越えている選手はいない。出場選手の中では昨年59m69の記録を持つ宗田 龍生（都芦花3）が最有力といえる。八種競技もこなす身体能力を生かし、スムーズなクロスからの投擲で60mオーバーを期待したい。同じ第四支部予選でその宗田を上回った森 将弘（堀越3）が58m52を投げ、一躍優勝候補に名を連ねた。都片倉の佐藤 悠樹（3年）も力があり優勝を争える。是非とも60mを越える投擲で競り合ってもらいたい。

・混成競技

八種競技では、昨秋の強化競技会で5112点をマークした本橋 輝久（都豊多摩3）が最有力だ。走・跳・投のバランスが良く苦手種目がないことが強みだ。昨年、関東に出場している大澤 聖也（堀越3）も故障が癒えた様子で「今年こそ」と意気込んでいる。この大会で4位までが南関東大会出場となるが、5000点に近づくことが条件だろう。試合経験の少ない東京都選手たちがどれだけ成長したかは今大会でしか見られない。

・リレー

4×100mリレーでは、東京高校が昨年1・2年生だけで40秒38の日本ユース歴代2位の記録を樹立している。今年はそのメンバーにルーキーが加わり、層が厚くなっている。エースの大嶋を擁して日本高校記録の奪還を目指したいところ。東京に対するのが城西大城西だろう。こちらエースのサニブラウン・A・ハキームを擁しているだけに40秒台をマークすることは間違いなさだろう。両校の争いになることは必至だ。また、八王子・成城・岩倉も昨年すでに41秒台で走っているだけに、今年も入賞は41秒台になることは間違いなさだろう。ここ数年レベルが上がっているこの種目だが、予選のタイムレースも見逃せない。

4×400mリレーでは、昨年の記録や支部予選の結果から城西大城西・東京・桐朋・八王子の戦いとなりそう。戦力的には城西大城西は層が厚く総力戦となれば一枚上となるが、オーダー次第ではどこが勝つかはわからない。最終種目の白熱したバトルを期待したい。この種目は南関東大会のレベルが高く、昨年も日大豊山が3分13秒台でインターハイへ出場できなかっただけに、半端なタイムでは全国出場は叶わない。そのためには、今大会から競り合い好記録を期待したい。

・総合

総合優勝は、短距離・跳躍・ハードル・投擲とバランスよく得点できる東京高校に間違いなさだろう。各種目で複数の入賞者を出せるのも得点力を上げる強みである。優勝回数も32回目に伸ばしそうだ。東京高校に対するのは、リレーをはじめスプリント種目や800mで加点できる城西大城西、長距離種目で多数入賞しそうな國學院久我山、競歩や長距離で加点できる東京実業が上位に食い込みそうだ。